

## 文字・表記（史的研究）

久保田 篤

## 一

最初に平成六年・七年に出版された文字・表記に関する単行本を挙げる。まず、河野六郎『文字論』（三省堂、平6・9）がある。著者のこれまでの論考を集めた書であるので、特に目新しい所があるわけではないが、文字関係の論考が一書にまとめられていて便利である。文字の根本的な機能は表語にあるという主張の影響が大きいことは周知のことであり、その価値は今なお減じていない。同じ河野六郎と西田龍雄の対談を収めた『文字鼎足』（三省堂、平7・5）も出された。日本語の文字に関する部分は多くないが、文字一般についての種々の問題を知ることができる。

日本語の文字・表記の専書で注目すべきものは、山口佳紀『古事記の表記と訓読』（有精堂出版、平7・9）である。氏の論考は、従来の研究を十分に参照しながらも、定説のようなものにとらわれず、新しい見解を提出し、説得力のある論証を行うものが多く、知的興奮を感じさせる。部分的には疑問の出されることもあろうが（例えば毛利正守『国文学』平7・12の学界時評）、質の高い魅力的な書であると言える。同じく上代の文字に関するものとして、瀬間正之『記紀の

文字表現と漢訳仏典』（おうふう、平6・10）も出されている。これらの書については、いずれ書評が書かれると思われるので、詳細はそちらに譲りたい。

漢字に関しては、林四郎・松岡栄志『日本の漢字・中国の漢字』（三省堂、平7・7）があり、第二章日本語の中の漢字（林四郎）の中に少し史的研究に関わる記述がある。また、杉本つとむ編『異体字研究資料集成』第二期全八巻（雄山閣、平7・12）が出され、合わせて第一期全十巻別巻二巻も復刊された。異体字の研究は最近増えつつあり、時宜に合ったものと言えよう。なお、蔵中進『則天文字の研究』（翰林書房、平7・11）も出され、一連の則天文字研究が本としてまとめられた。日本の資料に関する部分も少なくなく、労作と言える。

## 二

続いて論文を見る。漢字に関するものと仮名に関するものに分けて見ていくことにする。まず、漢字に関する研究を取り上げる。

字形・字体に関する論文には次のものがあつた。前田富祺「字史をめぐって」（『国語文字史の研究』2、和泉書院、平6・10）は、「世

字を例に挙げながら「字史」研究を進める際に考えるべき課題を数多く示したもので、字ぶとところが多い。西崎亨「上代人の文字意識」と「真福寺本古事記」(「鳴尾説林」2、平6・9)は、字体についての正字意識を探る。峰岸明「御堂閑白記」自筆本の漢字字体をめぐる二、三の問題」(築島裕博士古稀記念国語学論集「汲古書院」平7・10)は、「字形」「字体」について術語の規定を新しく行っている点が注目され、その規定に基づいて字体の観察を行う意欲的な論考である。ただ、従来の術語との関係についての説明がないため、やや分かりにくいところがある。柴田雅生「表記体と漢字字形についての一試論」(「国語文字史の研究」2)は、具体的な分析はやや物足りないが、問題点の指摘には傾聴すべきところが少なくない。藤田夏紀「前田本『色葉字類抄』と黒川本『色葉字類抄』の漢字字体の差異について——伊部の漢字——」(「鎌倉時代語研究」18、武蔵野書院 平7・8)は、興味深い調査である。このような作業の積み重ねによって、字体の変遷の特徴を見出せるようになることを期待したい。

異体字研究史に関しては杉本つとむ「異体字研究」と「干禄字書」(「早稲田日本語研究」2、平6・3)があり、日本における干禄字書の存在の大きさを説く。笹原宏之「元禄十四年刊『俗字正誤鈔』に関する基礎的研究」(「国語学 研究と資料」19、平7・12)はこれまで知られていなかった新資料の紹介。

国字に関しては、引き続き笹原宏之が精力的に研究を行っている。笹原宏之「メートル法単位を表す国字の製作と展開」(「国文学研究」114、平6・10)、同「メートル法単位を表す国字の各国における衰退」

(「国語学 研究と資料」18、平6・12)、同「地域文字の考察——地名に現れた日本語表記の時代差と地域差の一例——」(「文化女子大学紀要」2、平6・1)、

同「異体字・崩し字に字源俗解を介した漢字の国字化——「𪛗」からの「𪛗」の派生を例として——」(「国語文字史の研究」2)などで、多くの資料を見ながら、それぞれに興味深い問題を追求している。また、山田俊雄「ある擬製漢字についての所感——「𪛗」と「𪛗」と——」(「成城国文学」11、平7・3)は、現在の辞書には載せられていない「𪛗」の例を色々な資料に見出しており、「国字の研究が、研究書とか、辞書や字典に登録せられたものを中心に、珍しいものの蒐集というレベルにあくせくしてゐる限りでは、文字史に寄与するところはあまり多くない」という発言が生きている。

あて字に関しては、雑誌「日本語学」(平6・4)の特集があった。峰岸明「あて字はどのようにして生まれたか」は、借字表記が行われる事情を具体的な文献の例を引きながらうまくまとめており、分かりやすい好論文と言える。浅野敏彦「和漢混淆文のあて字——『熟田本平家物語』を例に——」・林義雄「古辞書のあて字——『名語記』「塵袋」を中心に——」・矢野準「近世戯作のあて字」では、それぞれの資料におけるあて字やあて字に対する意識について検討が行われている。木村義之「近代のあて字と文学」は、近代文学の本文中の実例についてもっと記述が欲しい気もするが、あて字に対する意識の変化を見ている点はよいと思う。

万葉仮名に関する研究として、犬飼隆「訓仮名の使用環境——大宝・養老戸籍の人名にみる——」(「国語文字史の研究」2)は、訓仮名の語義の切離しについての解明や、文献の性格と訓仮名の使用頻度との対応の指摘などが注目される。文献の性格と万葉仮名の字体の相関については、桑原祐子「正倉院文書」に於ける男性名構成要素「マロ」の表記」(「叙説」21、平6・12)でも追求され、顕著な事実を指摘し

ていて興味深い。

以下時代順に、漢字の用法、使用状況、文献内の表記等の問題を考察した論文を見る。上代の漢字表記に関するものは当然多い。幾つか挙げるに留める。雑誌「文字・語学」「国文学」等の展望・学界時評の古代の部分参照して欲しい。瀬間正之「上代に於ける「者」字の用法——助辞用法から助詞表記へ——」（『国語文字史の研究』2、前出の著書にも所収は、詳細な分析によって当時の実態を明らかにしている。奥田俊博「『古事記』の表記——和化された字義をめぐって——」（『万葉』153、平7・3）は、正訓字の中に和化された字義を担う字というものを考え、「控」「塩」「読」「走」「骨」等を挙げながら興味深い考察を行っている。「古事記」については、古事記研究大系10「古事記の言葉」（高科書店、平7・7）が出された。所収の文字関係の論文を挙げておく。山口佳紀「古事記の言葉と表記」は、引き続き仮名表記の理由や訓字二字の使い分け等の問題を考察している。浅見徹「古事記の漢字使用について」・毛利正守「古事記の表記をめぐって——「天降」と「天降」と——」・木村龍司「『古事記』における「哭」「泣」と「悲」・壬生幸子「古事記における「遣」と「使」——使者派遣場面の用字意識——」などの論文も、同内容の意味を表す漢字の使い分けについて述べる。犬飼隆「大量・神度剣・大葉刈・神戸剣」も、同語異表記に文脈の意味を見出している。小野田光男「古事記の大字「参」について」は字体の使い分けを指摘。ほかに藤井茂利「『古事記』の「在」の漢字の用法——朝鮮漢文との比較に於いて——」がある。吉井健「万葉集における母音脱落を想定した表記」（『万葉』152、平6・12）は、表現性を志向する表記に読みやすさへの配慮があることを明らかにしている明快である。

中古では、徳永良次「元永本『古今和歌集』の漢字使用の一側面」

（築島裕博士古稀記念国語学論集）は、万葉集の用字を手本とした漢字表記のあることを指摘する報告の続き。疑問を感じる記述はあるものの、追求しようとしている問題はおもしろいと思う。同「用字法と書写意識——平仮名本と片仮名本の比較を通して——」（『北海学園大学人文論集』5、平7・10）は、平仮名本と片仮名本で語の表記が仮名と漢字という違いがある点を問題にする目的付け所はよいと思う。しかし、既に言われていることを繰り返して述べるにすぎない部分が多いし、分析の中心となつてゐるツカハスの表記についてももっと違ふことが考えられる気がする。従来の研究方法以外に、書写意識を検討することが重要であると述べるが、この論文で書写意識の検討が行われているとは思えない。浅野敏彦「平安時代公家日記の漢字——「権記」寛弘七年一年間の漢字——」（『国語文字史の研究』2）は、当時の常用漢字を探る貴重な試み。同「平安時代漢字文献対照漢字表」（私家版、平7・10）も出されたようである。同「真福寺本将門記にみえる複数字体の漢字について——日本語の歴史における漢字の受容——」（『同志社国文学』41、平6・11）は、異体字の一方が和語もう一方が漢語の表記に用いられたとする漢字の例を挙げている。滋野雅民「説話における用字法——今昔物語集の「噉」と「食」の使い分け——」（『山形大学紀要（人文科学）』13・2、平7・1）は、副題の両字が、動作主が人か人以外かで使い分けられていることなどを述べる。

中世以降では、柚木靖史「延慶本平家物語」に於ける「ゲンス」と「アラハス」の表記について」（『広島女学院大学国語国文学誌』24、平6・12）は、ゲンスは「現」、アラハスは片仮名または「顕」「彰」等で書かれているとする。村田正英「冷泉家時雨亭文庫蔵『古来風鉢抄』

における和語表記の漢字」(『鎌倉時代語研究』18)には、「河」「川」等の同訓異字などについての定家筆資料との比較も行われているが、定家の漢字表記「河」については、川平ひとし「定家の歌の「河」

——用字論からシンボル論へ——」(『跡見学園女子大学国文学科報』22、平6・3)もあつた。高橋久子「室町時代の文献に見られる漢字の通用現象に就いて 其一」(『東京学芸大学紀要人文科学』46、平7・2)は、「幣」と「幣」のような通用する字を文書や古辞書から取り出ししている。

三保忠夫「庭訓往来天理図書館蔵本の所用漢字について」(『国語文字史の研究』2)も詳細な調査報告。特異な用字で知られる三河物語自筆本については、宇都宮睦男「『三河物語』宛字考」(『日本文化論叢』2、平6・3)が、上中巻と下巻の相違点・共通点を指摘、さらに同

「『三河物語』宛字再考(一)」(『愛知教育大学研究報告(人文科学編』44、平7・2)もあつた。矢野準「二黄表紙に於ける漢字(一)(二)」(『香椎鴻』39、40、平6・3、平7・3)では、板元による違いや共通性など興味深い問題が追求されている。黄表紙のように仮名を主とした文献における漢字の特徴を考察することは、重要なことである

と思う。明治時代の調査としては岩淵匡「浮雲」にあらわれた漢字について」(『早稲田日本語研究』3、平7・3)があつた。なお、擬声語の漢字表記を扱ったものとして、藤井涼子「野郎評判記」(『姿評評林』における音象徴語の漢字表記——漢字の用法の多様化——」(『同志社国文学』40、平6・3)が変わつた漢字表記の例を見出ししており、ほか

に太田広子「浮雲」の擬声語の漢字表記」(『就實語文』15、平6・12)もあつた。

### 三

続いて仮名に関する研究について見る。

最初に字形・字体に関するものを挙げる。前田富祺「たけくらべ」における平仮名の書体と字体」(『国語文字史の研究』2)、同「和字正濫鈔」の片仮名字体について」(『語文』62・63、平7・1)では、これまでの氏の字体に関する論考と同じく「文字特徴」による字体の分類等が行われており、着々と調査・研究が進められている。ただし文字特徴に対しては様々な考え方があろう。矢田勉「いろは歌書写の平仮名字体」(『国語と国文学』平7・12)は、中世の古文書を幅広く見ている点が特徴である。平仮名書いろは歌が中世の文書世界から生じたとする考えは注目されるが、その立証は十分であるとは言いがたい。しかし種々の資料における平仮名書いろは歌について詳しく述べられてあり、参考になる。非連続ということに目をつけている点もよいと思う。

定家本の表記については、池田利夫「藤原定家の撥音識別表記確立と崩壊」(『国語と国文学』平7・3)があり、これに対する批判として、こまつひでお「仮名文テクストの文献学的処理——書記の理論的確な解釈・音韻史との相関・資料の均質性——」(『国語と国文学』平7・9)が出された。池田論文の調査結果には興味深い事柄も見出されると思う。しかし、実態の解釈については、こまつ論文の批判が正しいと見られる部分が多い。特に問題だと思われるのは、こまつ論文の副題の最後にある、資料の均一性ということに対する配慮が欠けている点である。定家本の用字に関しては、多くの研究者によって様々な考察が行われてきているのであるから、撥音を直接扱ったもの以外の

論考も参照して、それらの成果を取り入れる必要がある。こまつ論文は、池田論文の批判に重点がおかれているため、氏の従来の見解の提示が中心となっているが、最初に「字素」「異字」「位置変種」「互換変種」という術語を挙げている点は、それがふさわしいものであるかは別にして、以前の「基本字形」「特殊字形」あるいは「有標の字母」「無標の字母」等とはまた別のものとして注目される。また、「む」と「ん」の関係を、「志」と「し」等の関係と同じと見る点も、当然考えるべきことであるが見落としがちなことであり、このほかにも色々気付かせてくれるところの多い論文であると言える。

こまつ論文では最後に「ん」の字形の検討の重要性が述べられるが、その「ん」字の問題を扱ったものに、中川美和「平安時代平仮名文献における「ん」字の表記についての一考察」(『都大論究』31、平6・6)、同「む」「も」を表すといわれる仮名「ん」字小考——『新書屋本土佐日記と定家筆本土佐日記の表記の比較を通して——』(『日本語研究』15、平7・2)がある。堅実な調査であり、その結果を示した表は有益である。特に書道作品と書状との違いの指摘は注目されるが、それに対する解釈は残念ながらもまだ推測の段階に留まるものである。なお、一つの字が撥音・促音の両方を表すという点を扱ったものに長谷川千秋「撥音・促音の混用表記に関する一考察——天正狂言本を中心に——」(『叙説』21、平6・12)があり、やや考察が不十分な感じもするが、このような問題の追求は意義のあることと思う。

仮名遣いに関する論文は、次のものがあつた。中川美和「平安遣文」における語中・語末のハ行音ほかの平仮名表記について」(『都大論究』32、平7・6)は、やはり仮名書道作品との共通点・相異点を挙げてゐる所が目を引く。共通して語表記の固定してゐるものの例

は注目されるが、歴史的仮名遣いと合致するものについても挙げる事ができればよいと思う。樋野幸男「有標の仮名」として機能する仮名」(『東海学園国語国文』47、平7・3)は、片仮名文の仮名遣いを扱っている。主張する「有標の(仮名)」というようなものがある(特にワ行の仮名にその機能を認める)とする点には賛成である。仮説の検証が次稿になつてゐるのが残念である。小野正弘「正徹本徒然草」の和語のかなづかい」(『国語論究』5、平6・10)、同「鳥丸本の方が定家仮名遣いに近いという指摘が注目される。ただ、歴史的仮名遣いと一致しない例についてのみ考えようという方法には問題があると思う。最後に述べられているような「定家かなづかいとのダイレクトなきき当て」の結果が出されるのを待ちたい。坂詰力治「伏見院宸翰本『松浦宮物語』の仮名遣いについて——和語を中心として——」(『築島裕博士古稀記念国語学論集』)も貴重な調査であるが、これも歴史的仮名遣いを規準とし、その「誤用」の語についてのみ定家仮名遣いと対照しており、不十分な検討だという感じが否めない。

今野真二「荒木田守武のかなづかい——自筆本を中心資料として——」(『国文学研究』112、平6・3)は、鎌倉期資料との「つながり」や、「新撰仮名文字遣」の性格について述べてゐる所が目を引く。同「俳諧」連歌のかなづかい——かなづかいにおける「正風」と「俳諧」と——(『早稲田日本語研究』2、平6・3)は、同じ作者の性格の異なる資料で仮名遣いの傾向が異なることを見出した点が目される。ただ、和語と字音語の仮名遣いの相互干渉という点にはまだ考慮の余地があるように思う。同「草稿本と浄書本——荒木田守武独吟千句の場合——」(『国語国文』平6・10)は、漢字字形・語形の比較も行われているが、仮名遣いの

ゆれの分析が中心。同「仮名遣書のゆれ——慶長版『仮名文字遣』について——」（『国語国文』平7・8）は、文明十一年本以外の本との比較もあれば更にありがたいが、規範を示す書におけるゆれを追求することはおもしろいテーマであり、この類の作業は行う意義が大いにあると思う。安田章「平仮名文透視」（『国語国文』平6・9）は、太田牛一の著作の字音語の仮名遣いの調査を出発点に、仮名遣書の特徴や平仮名文献の価値などの諸点を検討したもので、教えられるところが多い。特に仮名遣書についての種々の指摘は貴重である。坂梨隆三「かなづかいの変遷」（『俳句研究』61・2、平6・2）は概説的なものであるが、子規の句や現代の短歌・俳句の仮名遣いについても少し触れるところがある。高瀬正一「『仮名都加比』と『仮名文字遣』——歴史的仮名遣いとも関連づけて——」（『愛知教育大学研究報告』44 大文科学編）、平7・2）では、仮名遣いの用例に興味をひくものがある。しかし、宣長の『仮名都加比』の、『仮名文字遣』や歴史的仮名遣いと相違する部分について、自身も「他の仮名遣い書や仮名遣いの実態も考え併せて結論をくださねば」と述べるにもかかわらず、契沖著作の記述との比較だけから推測をしている。中世・近世の仮名遣いの実態については多くの人が調査を行っているのであるから参考にするべきであり、他の仮名遣書の調査も不可欠であろう。京極興一「夏目漱石の字音仮名遣い」（『学海』10、平6・3）では、誤用が無視できない程度にあるという点の指摘が貴重である。以上のように、仮名遣いの研究はやはり多く、それぞれに興味ある考察を行っている。勿論、なかには、例えば江戸時代の一文獻について、「い」であるはずの表記を「ひ」「ゐ」としたものととして語例を挙げ、歴史的仮名遣いと異なった表記を頻繁に行っているということと済ませてし

まうものや、一つの文献の一つの仮名だけを調べた、果たして何の意味があるのか分からないようなものも、あることはあったが、多くは、問題意識をもって調査を行っていると言える。なお、歴史的仮名遣いが規範とされる以前のものについて、歴史的仮名遣いとの一致・不一致を考えることに意味があるのかどうか疑問を感じる人は多いと思われる。古用に合う部分も含めた全体を見渡した考察を行う必要があることは、しばしば言われる通りである。

仮名の用字法、いわゆる仮名文字遣いに関する論文も多かった。矢田勉「異体がな使い分けの発生」（『築島裕博士古稀記念国語学論集』）は、今までのこの問題についてはあまり調査の多くなかった古文書の例が示されていて有益である。使い分けの発生が踊り字用法の変化だけによるものなのかは分からないが、興味深い指摘であると思う。初めに「書きやすい」書記の追求という視点を述べるのも注目される。踊り字用法の変化は書きやすさの経済とは反するものと思われるが、それ以上に語頭というようなものに対する意識が強まったということになるのだろうか。豊田尚子「藤原俊成自筆『古来風躰抄』」（上）にみられる仮名の字体について——万葉抄出歌の表記に注目して——（『鎌倉時代語研究』18）では、表記形態を十種に分類した上で字体の調査を行う等、詳細な分析が行われている。定家に加えて俊成の用字法の研究も着実に進められ始めているようである。依田泰「定家本『土左日記』仮名遣い小考——「を」と「乎」に関するノート——」（『日本文学』平6・9）は、「乱れ」とも見られる現象のある『土左日記』の用字の考察は重要だと思いが、種々の点について、他の可能性を検討する訳でもなく、「……ことが想像される」として済ませてしまわない、説得力に欠ける。島田康行「兼載自筆『連歌延徳抄』の表記に

ついで」(『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』三省堂、平6・10)は、「う須こく」に対する考え方の成り立つ可能性はあると思うが、最後にそれが確定したような書き方で論を進めるのは避けた方がよいと思う。今野真二は、このテーマでも多くの論文を書いている。仮名の字体を一つ一つ検討していくことは、かなりの労力を必要とする。それを多くの資料について精力的に進める意欲には敬服する。今野真二「中世の仮名文字遣小考」(『はの場合』(『国語国文』平6・2)は、膨大な資料を調査した力作。それでも、「は」だけでなく他の仮名についても知りたいという欲が出てきてしまう。「は」については既に種々の文献の報告がなされているということがあるからである。同「仮名文字遣いからみた『落葉集』」(『は』の場合)——(『国文字研究』115、平7・3)は、この資料の「は」の仮名の整然とした用字と、例外的表記の傾向を見出している点が注目される。同「かしこくなる仮名」——『源氏物語』古写本の『遍』について——(『国学院雑誌』平7・4)も詳細な調査を行ったもので、仮名文字遣いの型を見出している。その前後関係がある程度はつきりして、最も機能的な型へという流れが明らかにできるとおもしろい。同「書記における「行」意識」(同、平7・12)は、これまであまり考察されなかった「行」に対する意識を考えたもの。次第に「行」から「語」に目が向けられるという見通しも興味深い。同「仮名文字遣からみた日本大学図書館本『土左日記』」(『高知大國文』26、平7・12)は、「古代仮名」(先に触れた「ん」字の検討も含まれる)や稀少字体についての考察もあつて興味を引く。特に、仮名文字遣いを考えるに当たつて、行に関わるものと、語頭など分節に関わるものの二種類を区

別する見方は注目される。室町・江戸時代の資料を扱う小林賢章「歌書仮名遣い」(『同志社女子大学日本語日本文学』7、平7・10)は、初めに仮名遣いの定義を最も狭いものとしながら、調査をしているのはいわゆる仮名文字遣いであるので、題名と合わないのが不審であり説明の欲しいところであるが、最後に「男重宝記」等における披の背後意識を考えた箇所は興味深く、更に追求する必要がある問題だと思ふ。明治時代の調査をした同「明治初期の表記——あるキリスト教文献の場合——」(同6、平6・10)もあつた。江戸時代の資料を検討したものとしては、久保田篤「仮名草子整版本における仮名の用法(上)(下)」(『茨城大学人文学部紀要(人文学科論集)』27、平6・3、平7・3)、同「草双紙の用字法——赤本の仮名字体の用法を中心に——」(『築島裕博士古稀記念国語学論集』)、玉村慎郎「春色梅児誉美」における仮名の用字法」(『国語文字史の研究』2)がある。玉村論文は、同字源由来の異字体についてかなり詳細に調査を行ったもので、仮名字体を字源にまで還元する方法には重要な事実を見落としてしまう危険があるという指摘が説得力を持つ。江戸時代の「字母」の用法などとする調査は欠陥のある可能性が言えよう。以上であるが、この種の調査・研究は、これまでは定家本及びその周辺の資料が中心であり、それ以外には「は」の仮名の字体の調査が幾つかあるという状態であつた。それに対して、今期は資料の幅がかなり広がつた点特徴であると言える。

#### 四

以上のほかの、ローマ字や補助符号などに関する論文はあまり見当たらない。キリシタン資料については、吉見孝夫「キリシタ

ン資料における *zvu.ɔvu* の改行処理」(『語学文学』(北海道教育大学) 32、平6・3)があつた。踊り字については、東辻保和「踊り字の沿革について——「々」を中心に——」(『鎌倉時代語研究』18)があり、種々の文献の例が出されていて知識を得られるところが多い。*ɔvu* 音を表す特殊な記号については、馬淵和夫「もう一つの *ɔvu* 音表記」(『訓点語と訓点資料』94、平6・9)がある。特殊記号を含めてこの *ɔvu* 音の表記を扱う肥爪周二「日本漢字音における喉内鼻音韻尾の鼻音性とその表記——清濁の対立との相関——」(『明海日本語』1、平7・3)は、表記法をレベルによつて三つの段階に分類しているのが注目されるが、分類することによつてどんなことが見えてくるのかあまりはつきりしていないのが惜しい。大熊智子「引用符を用いた会話文表記の成立」(『東京女子大学日本文学』84、平7・9)は、興味深い実例を示している。柏木成章「近代表記の一研究」(『大東文化大学紀要』32、平6・3)は、明治以降の小説の句読・会話等の表示についての大きな概観であるが、やはり興味深い指摘がある。

## 五

なるべく「文字・表記」の研究としてふさわしいものを取り上げようと心掛け、以上の論考を紹介するという結果になつた。関連分野も含めてもっと幅広く見るべきだという考え方もあろうが、紙面の制約ということもあり、このような形になつた。既に紹介した通り、漢字・仮名それぞれに関して多くの論文が書かれている。(それでも、他の分野に比べれば先行研究は格段に少ないと見られる問題を扱いながら、これまでの研究成果を生かしていないものが幾つも目についたのは残念である)。ただし、漢字の研究は当然のことながら古い時代を対

象にしたものが多く、中世・近世の研究はあまり多くない。また、今回便宜的に漢字と仮名に分けて見たのは、両方に関わる論文が非常に少なかつたからということにもよるのであるが、異なる文字体系同士の関係を追求めたもの、送り仮名の調査、文字と補助符号を絡ませた研究等は、相変わらず殆どなかつた。これらは、傾向が見出しにくい、処理が難しいなどの問題があり、論文としてまとめるのが困難な場合が多いので、あまり研究が活発でないのもやむを得ないと思うが、考えていかなければならない課題と言えよう。

用字の選択に何らかの意味を見出そうとする研究が多かつたことも、特徴として挙げられる。複数の字が使用可能な場合に、ある一つの字が選ばれた理由、使われた意図などを考える論考が増えている。上代を対象とした研究の多くが字の表現価値を問題にしているし、いわゆる仮名文字遣いの研究(仮名遣いの研究にも一部この類のものがある)の中にも、そのような点を考えるものが多い。これらは以前から考察が行われており特に新しいテーマというわけではないが、文字に特有の問題であり、文字研究としてふさわしいものである。見出された結果・傾向がどの程度意図的なものなのか、判断が難しい場合も多いが、今後も各時代にわたつて調査する価値のあることであろう。また、やはり文字特有の、文字の形を問題にした研究も増えてきている。それもただこういう形があつたというに止まらず、何らかの特徴を考えるなど、一歩進んだ段階に行きつつあると言える。

以前から何度も指摘されている術語の問題については、相変わらずといった状態で、あまり進歩していない。今期既に紹介した通り、何人かの研究者が新しい術語や規定を提唱している。それらは意欲



的な試みとして評価されるが、それぞれが独自に考えており、従来のものとの調整等はあまり考慮されていない。また、例えば峰岸明・こまつひでお両氏が同じ「異字」という術語を使うが、その意味するところは異なっている。近年の前田富祺・犬飼隆の両氏の体系的な規定の試みについても殆ど言及されないままとなっている。あまり議論が進まないのは、各研究者の考えるところに隔たりがあるためということもあるであろうが、ある程度の共通理解のようなものができた方がいいに違いない。字体等の示し方も、例えば入れる括弧が「」「」など論文によってまちまちであり、これなども統一されればよいと思うが、当然術語の規定も絡んでくることであり、この程度のことでも簡単に済むことではないのかもしれない。

今期に出された概説書・教科書の類についても述べておきたい。従来これらの文字・表記に関する章は、漢字の伝来、音と訓、万葉仮名、平仮名・片仮名の字源、仮名遣いの発生といった事柄に一通りに触れて終わるといったものが殆どであり、近年の研究により明らかにされてきたことが全く生かされていないという感じが否めなかつた。しかし、今期の林史典「文字・書記」(『日本語要説』ひつじ書房、平7・3三刷で増補)、伊坂淳一「文字・表記」(飯田晴巳・中山緑朗編『概説日本語学』明治書院、平7・9)、佐藤稔「古代の文字」・小野正弘「近代の文字」(佐藤武義編『概説日本語の歴史』朝倉書店、平7・10)などは、従来の型にとらわれない記述を行ったり、新しい研究成果を積極的に取り入れたりしており、漸く現在の研究水準を反映するものが増えてきたと言えることができる。

— 今回様々な論考を読んだことは、私にとって大変勉強になること

でもあった。時に注文めいたことも述べたが、私自身もいつも反省をしていることなどもあり、実は何も言う資格などないのかもしれないが、自戒も込めて敢えて書いたことが多い。内容を十分理解していないこともあると思う。また、大きな見落としがあるかもしれない。すべてお許し願いたい。

— 成蹊大学文学部助教授 —